●〈症例〉

内視鏡的乳頭切除術にて治療しえた 十二指腸乳頭部腺腫の1例

大野 隆¹⁾ 水口澄人 北村 匡 川添一哉
橘田 輝雄 梶原 博²⁾ 朴 勝春³⁾ 佐伯威男
西元寺克禮

¹⁾伊勢原協同病院／内科, ²⁾同／病理, ³⁾北里大学医学部／内科
〔Key Words〕内視鏡的乳頭切除術, 十二指腸乳頭部腺腫

はじめに

十二指腸乳頭部腺腫に対する治療は、以前は外科手術によるものがほとんどであったが、近年侵襲の少ない内視鏡的乳頭切除術(Endoscopic Papillectomy 以下EP)が行われるようになって来た¹⁻³⁾。今回我々は完全生検を目的としてEPを行い治療しえた十二指腸乳頭部腺腫を経験したので報告する。

症 例

患者：63歳 女性。

主訴：十二指腸乳頭部腺腫精査。

既往歴：虫垂炎手術(27歳)、卵巣嚢腫手術(27歳)、子宮筋腫手術(44歳)。

家族歴：母 心筋梗塞、姉 肝細胞癌、姉 胃癌。

現病歴：56歳時に胆嚢ポリープ精査のためERCPを行い十二指腸乳頭部腺腫を診断された。その後は6カ月に一度内視鏡と生検による経過観察を行っていたが、増大傾向を認めたため、診断後6年経過し精査目的で入院となる。入院時現症：下腹部に手術痕ある他問題なし。入院時検査成績：血液生化学検査ではCEA, CA19-9を含め異常を認めなかった。

腹部US所見：胆嚢頸部に直径5mmのポリープを認めた。

腹部CT所見：異常所見なし。

十二指腸造影所見：腫瘤状の乳頭を認め、同十二指腸係蹄辺縁に異常を認めず(Fig. 1)。

十二指腸乳頭内視鏡所見：乳頭は長径14mm大の垂有茎性で、その基部は正常粘膜でおおわれ頂部は一部にカリフラワー状の変化を認めたが、潰瘍形成はなかった(Color 1-A, B)。また胆管、膵管別開口であった。

ERCP所見：乳頭部の膵管及び主膵管には問題なかった。副膵管は主膵管に比較して細く発達していなかった。また胆管は乳頭部の胆管を含め異常なかった(Fig. 2)。

以上十二指腸乳頭部腫瘍に悪性を示唆する所見がない事より、古川らの論文を参考に十分なインフォームド・コンセント¹⁾のもと完全生検を目的としたEPを施行した。方法はERCPと同様に十二指腸内視鏡にてスネアを乳頭基部にかけ絞扼して切開波電流にて十二指腸乳頭を切除した(Fig. 3, Color 1-C, D)。

臨床経過：乳頭切除当日より腹痛、腹部反跳痛出現。血液生化学検査では血清アミラーゼ3,658IU/L、白血球11,200/ μ Lと上昇し、腹部US上やや膵の腫大を認める急性膵炎を起こしたが、メシル酸ナファモスタット、ウリナスタチン、抗生物質にて保存的に治療し7日めには軽快した(Fig. 4)。なお他の合併症である出血、穿孔、胆管炎は認めなかった。経過観察として18日後と6ヶ月後に内視鏡検査を行ったが、切断面は問題なく(Color 1-E)、生検でも腺腫は認めなかった。

切除標本(ホルマリン固定)：切除乳頭の大きさは12×9×5mmで粘膜面の胆管開口部と膵管開口部、また切断面の胆管と膵管の断面が同定可能であった(Color 2-A, B)。

病理組織所見：腺管構造の一部に乱れた部分があるが、細胞は高円柱状で核は基底層に偏在しており明らかな悪性所見はなく中等度の異型の腺腫で(Color 2-C)、また胆管、膵管への腺腫の進展はなかった。

考 察

十二指腸乳頭腺腫に対する治療は近年の縮小手術化により、EPが外科的切除術に変わって行われるようになり、特に古川らの研究¹⁾により確立されてきた治療法である。十二指腸乳頭腺腫の生検による経過観察には、生検診断の限界として1. 生検は標本が小さい。2. 分化度の高い癌と腺腫の鑑別が困難。3. 同一腫瘍内で異型度が異なる。

Fig. 1 Rentgenogram shows swelling of the papilla of Vater (arrow).

Fig. 2 Endoscopic retrograde cholangiopancreatography (ERCP) shows normal findings in the bile duct and main pancreatic duct. However accessory pancreatic duct is narrow (arrow).

が存在し、それに対して EP は、異型度が生検診断より切除後病理診断のほうが高くなり、治療としての切除成績も良好である¹⁾。そこで我々は腺腫の増大傾向を認める事より完全生検を目的とした EP を行った。結果として治療切除も出来たが、この症例では生検診断に比較して悪性度の増加はなかった。

このように本疾患に対する EP は有用ではあるが、膵管と胆管が合流するという解剖学的複雑さより、通常のポリペクトミーや粘膜切除術における出血、穿孔のみならず、急性膵炎、胆管炎(閉塞性黄疸)といった特殊な合併症があり、いかに合併症を防ぐかが問題で、現時点では予防法に確立されたものは無い。この症例では急性膵炎を起こしたが保存的に加療し治癒しえた。副膵管の非開存例は開存例に比し有意に血清アミラーゼが高値になる事²⁾より、切除後の膵液の流出障害が膵炎の増悪因子になることは予測され、本症例のように副膵管の発達が良い場合膵管ステントを留置すべきであったと考えられたが、この予防法に関してはプロスペクティブに検討してみなければ結論づけられないと考えられる。しかし実際は十二指腸乳頭部腺腫の頻度が少ないため、このような症例報告の蓄積による検討を期待したい。

文 献

- 1) 古川 剛, 大橋計彦, 渡辺吉博, 他: 十二指腸乳頭部腺腫に対する内視鏡的乳頭切除術の有用性. *Gastroenterol Endosc*, 41: 284—295, 1999.
- 2) 伊藤彰浩, 塚本純久, 内藤靖夫, 他: 内視鏡的に切除し得た十二指腸乳頭部腺腫の 1 例—管内超音波検査法の有用性を含めて—. *Gastroenterol Endosc*, 37: 1890—1896, 1995.
- 3) 古川 剛, 大橋計彦, 栗本組子, 他: 内視鏡的に切除した径35mm の十二指腸乳頭部腺腫の 1 例. *Gastroenterol Endosc*, 38: 2201—2206, 1996.

A Case of Adenoma of the Papilla of Vater Resected by Endoscopic Papillectomy

Takashi Ohno¹⁾ Sumito Mizuguchi
Tadashi Kitamura Kazuya Kawazoe
Teruo Kitsuda Hiroshi Kajiwar²⁾
Katsuharu Boku³⁾ Takeo Saeki
Katsunori Saigenji

We reported a rare case of adenoma of the papilla of Vater. A 63-year-old female had been diagnosed to adenoma of the papilla of Vater on ERCP and biopsy before 6 years. The papilla was followed up by endoscopy every 6 months. Recently, the papilla was enlarged and deformed with granular surface. ERCP showed normal findings in biliary system and main pancreatic duct, however accessory pancreatic duct was narrow. We performed endoscopic papillectomy for completely biopsy under the informed consent. Since endo-

Fig. 3 Schema of endoscopic resection of Vaterian tumor (endoscopic papillectomy). mp, muscularis propriae; s, sphincter of Oddi; c, common bile duct; p, main pancreatic duct.

Fig. 4 Clinical course after endoscopic papillectomy. FUT, nafamostat; UL, ulinastatin; CTM, cefotiam.

scopic papillectomy is a safe treatment and useful in the final pathological diagnosis of the adenoma diagnosed by biopsy. The tumor was resected completely and the final pathological diagnosis was adenoma. However acute pancreatitis, one of the complication of endoscopic papillectomy was occurred. This acute pancreatitis recovered by conservative therapy. Six months after papillectomy there was no sign of recurrence. This case suggested that endoscopic papillectomy is useful for adenoma of the papilla of Vater and that method of prevention from the complication of endoscopic papillectomy will further be investigated.

¹⁾Dept. of Internal Medicine and ²⁾Dept. of Pathology, Isehara Kyodo Hospital. ³⁾Dept. of Internal Medicine Kitasato Univ. School of Medicine.